

穂高町

一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡

穂高沢水系による開発沢、上原古墳

一担い手育成基盤整備事業穂高
西部地区に伴う発掘調査報告書一

2001.3

長野県 穂高町教育委員会

穂高町

一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡

穂高沢水系による開発沢、上原古墳

一担い手育成基盤整備事業穂高
西部地区に伴う発掘調査報告書一

2001.3

長野県 穂高町教育委員会

序

穂高町の上原、田中、本郷地区は、鳥川扇状地の扇央から扇端に位置し、安曇野でも有数の穀倉地帯として知られていますが、この安曇野を代表する田園地帯を形成するまでには、我々祖先の並々ならぬ開発の歴史がありました。そしてその開発の歴史（沢の開発）は古代にまで遡ると考えられています。また、数多くの遺跡が点在する所もあります。しかし、これまでこれらの遺跡は水田下に埋もれており、性格、歴史的位置付け等わからぬ部分がたくさんありました。

今回県営担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に先立ち、広範囲にわたりトレンチ調査を主とする確認調査を実施いたしました。その結果、基盤整備事業内にある遺跡の時代的位置付け等が判明するとともに、それらの遺跡は当初予想していたより、深くに埋蔵されていることがわかり、県土地改良課のご協力で設計変更等していただき遺跡は保護していただく運びとなりました。また、前述の沢の開発の調査も併せて行い、基盤整備事業で消えてしまう古代からの沢跡も詳細に記録に残すことができました。また翌年には、穂高町誌等で不明な点が多かった上原古墳と上原古墳群の調査を実施し、その構築の方法等明らかになってきた点も大変意義深いものとなりました。

今後、本調査結果は、穂高町の歴史を知る上で大変重要なものになると思います。

最後に、この調査にあたりご理解ご協力下さいました調査員の先生方をはじめ、地元土地改良区ならびに地元の方々など関係各位に、心より謝意を表して序といたします。

平成13年3月

穂高町教育委員会

教育長 松尾 明保

例　　言

1. 本書は、担い手育成基盤整備事業 穂高西部地区に伴い、松本地方事務所と穂高町との委託契約にもとづいて穂高町教育委員会が実施した、穂高町大字穂高 一本松遺跡・神の木遺跡・宗徳寺遺跡・南原遺跡・穂高沢水系開発沢・上原古墳・上原古墳群調査報告書である。
2. 調査は平成9年11月26日から同年12月5日まで神の木遺跡・一本松遺跡の調査を、平成10年2月10日から同年3月10日まで宗徳寺遺跡・南原遺跡の調査を、平成10年1月8日から同年2月6日・平成10年3月10日から18日まで穂高沢水系の開発沢の調査を行った。また、平成11年1月11日から同年2月5日まで上原古墳及び上原古墳群の調査を行った。経費については、松本地方事務所からの委託金及び国庫、県費補助金を受けた。
3. 本書の編集は事務局が行い、執筆は、以下のとおりである。

第1章：事務局 第2章：重野 昭茂、山下 泰永

第3章 第1節：山下 泰永 2節－1)：山下 泰永 弥生土器：白居 直之

2節－2)：重野 昭茂 2節－3)：重野 昭茂、山下 泰永

4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器接合・復元

注記 矢口健陽児、田中 基義

土器実測・製図 白居 直之、山下 泰永

土器拓影 矢口健陽児、田口美智子

遺構図整理 山下 泰永、重野 昭茂、深沢 貞臣、深沢 恒則

トレース 山下 泰永、田口美智子

遺構写真 重野 昭茂、深沢 貞臣、蓮井 實次、田中 基義

5. 本書に掲載した図類の縮尺は本文中に図示してある。

6. 南原遺跡出土弥生土器実測及び解説については、長野県埋蔵文化財センター白居直之氏にお願いした。記して謝意を表したい。

7. 上原古墳調査における土層については、大町高校講師森義直先生にご教示を得た。記して謝意を表したい。

8. 上原古墳の構築方法等については、桐原健氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

9. 本調査に関する事務書類及び測量図面類、写真、遺物、実測図などは、穂高町教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査経過.....	1
第1節 事業の経緯.....	1
第2節 調査体制.....	2
第3節 調査日誌.....	2
第2章 遺跡の環境.....	4
第1節 地形と地質.....	4
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査結果.....	8
第1節 調査の概要.....	8
第2節 調査の結果.....	9
1. 一本松遺跡・神の木遺跡・宗徳寺遺跡・南原遺跡の確認調査.....	9
2. 穂高西部地区内穂高沢水系開発沢の調査.....	20
3. 上原古墳群及び上原古墳の調査.....	55

図・表 目 次

第1図 周辺遺跡	7
第2図 一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡調査箇所位置図	11
第3図 一本松・神の木遺跡調査範囲図	12
第4図 宗徳寺遺跡調査範囲図	12
第5図 南原遺跡西部調査範囲図	13
第6図 南原遺跡東部調査範囲図	13
第7図 神の木遺跡土層柱状図	14
第8図 一本松遺跡土層柱状図	14
第9図 宗徳寺遺跡土層柱状図	15
第10図 南原遺跡西部土層柱状図	15
第11図 南原遺跡東部土層柱状図	16
第12図 南原遺跡東部土層柱状図	17
第13図 南原遺跡東部出土平安時代土器実測図	17
第14図 南原遺跡東部出土弥生土器実測図	19
第15図 穂高沢水系による開発沢	21
第16図 上原古墳群調査範囲図	58
第17図 上原古墳出土土器実測図	60
第18図 上原古墳調査範囲図	61
第19図 上原古墳土層セクション図他	63
第1表 遺跡地名表	6

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯

- 平成8年10月3日 埋蔵文化財保護協議会を穂高町民会館にて実施。出席者は長野県教育委員会、長野県松本地方事務所、穂高町役場農林課、穂高町教育委員会。
- 12月19日 平成9年度補助事業計画書提出
- 平成9年5月29日 平成9年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出。
- 7月3日 平成9年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知。
- 7月3日 平成9年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。
- 7月14日 平成9年度文化財保護事業補助金交付決定通知。
- 10月16日 平成9年度扱い手育成事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 平成10年3月31日 平成9年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金の額の確定通知。
- 3月31日 平成9年度文化財保護事業補助金の額の確定通知。
- 平成10年5月11日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。
- 6月24日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。
- 6月24日 平成10年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。
- 6月29日 平成10年度文化財保護事業補助金交付決定通知。
- 11月13日 南原遺跡が設計変更により保護されることになる。
- 11月16日 平成10年度扱い手育成事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 11月17日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出。
- 12月10日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金変更交付決定通知。
- 12月10日 平成10年度文化財保護事業補助金計画変更承認申請書提出。
- 12月14日 平成10年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
- 平成11年3月31日 平成10年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金の額の確定通知。
- 3月31日 平成10年度文化財保護事業補助金の額の確定通知。
- 平成11年4月16日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。
- 5月24日 埋蔵文化財保護協議会（上原古墳の保護の要請）を穂高町民会館にて実施。出席者は長野県教育委員会、長野県松本地方事務所、穂高町役場農林課、穂高町教育委員会。
- 6月8日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。
- 6月8日 平成11年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。
- 6月9日 平成11年度文化財保護事業補助金交付決定通知。
- 11月8日 上原古墳が保存されることとなり、本年度調査は行わないこととなる。
- 12月1日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出。

- 平成12年2月16日 平成11年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金変更交付決定通知。
- 2月17日 平成11年度文化財保護事業補助金計画変更承認申請書提出。
- 2月17日 平成11年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
- 平成12年4月14日 平成12年度国宝・重要文化財等保存整備費交付申請書提出。(報告書作成)
- 5月31日 平成12年度国宝・重要文化財等保存整備費交付決定通知。(報告書作成)
- 5月31日 平成12年度文化財保護事業補助金交付申請書提出。(報告書作成)
- 6月1日 平成12年度文化財保護事業補助金交付決定通知。(報告書作成)
- 9月27日 平成12年度担い手育成事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約(報告書作成事業)を結ぶ。

第2節 調査体制

調査団長	松尾 明保(總高町教育委員会教育長)
調査担当者	山下 泰永(生涯学習課社会教育係主任)
調査員	森 義直(地形・地質)
調査協力者	今村 克 白居 直之 腰原 弘之 重野 昭茂 田口美智子 田中 基義 寺島 秀哲 蓬井 寅次 深沢 貞臣 深沢 恒則 矢口健陽児
事務局	平成9年度 中島 芳孝(生涯学習課長) 大内 善司(社会教育係長) 山下 泰永 浅川 恭克 白沢みき江 田矢 徳康 和田 尚子 平川 嘉幸 松沢 一恵 山口 尊礼 平成10年度 三浦 孝充(生涯学習課長) 大内 善司(社会教育係長) 山下 泰永 浅川 恭克 白沢みき江 望月 剛 和田 尚子 内山 隆弘 松沢 一恵 山口 尊礼 平成11年度 胡桃 寿明(生涯学習課長) 西條 幸生(社会教育係長) 山下 泰永 勝野 伯一 望月 剛 内山 隆弘 矢口 泰 堀金 一恵 高山 英利 平成12年度 胡桃 寿明(生涯学習課長) 西條 幸生(社会教育係長) 山下 泰永 勝野 伯一 内山 隆弘 矢口 泰 堀金 一恵 高山 英利 古畠 瑞恵 吉村 千月

第3節 調査日誌(抄)

平成9年度

平成9年11月26日(水)～28日(金) 神の木及び一本松遺跡調査準備

12月2日(水)～4日(木) 神の木・一本松遺跡 重機により耕土除去作業をし、トレンチ等をあける。その後遺構確認及び土層調査をおこなう。調査終了後、埋め戻し作業をおこなう。

12月 5 日（金） 片付け

平成10年 1月 8 日（木）～14日（水） 穂高沢水系の開発沢の踏査・聞き取り調査。

平成10年 1月16日（金）～23日（金） 大雪のため一時中断。

1月26日（月）～2月 6 日（金） 穂高沢水系の開発沢の踏査・聞き取り調査・古地図との照合。

3月10日（火）～18日（水） 穂高沢水系の開発沢の写真撮影及びまとめ。

平成10年 2月 9 日（月）～10日（火） 宗徳寺・南原遺跡の調査準備

2月12日（木）～13日（金） 宗徳寺遺跡 わずかの調査範囲であったため人力でトレッセをあけ遺構確認及び土層調査をおこなう。

2月18日（水）～3月 9 日（月） 南原遺跡の調査 重機により下層の土と混じらないよう耕土除去作業をし、トレッセ等をあける。その後遺構確認及び土層調査をおこなう。調査終了後、この地区は、ほ場整備までに一作ある為、各トレッセ水田耕作で支障をきたさぬよう転圧機械で養生をしながら埋め戻し作業をおこなう。

3月19日（木）～20日（金） 平成 9 年度事業まとめ

平成 10 年 度

平成10年10月 6 日（火） 田中麦大豆振興センターにおいて地元関係者と遺跡調査説明会開催する。

平成11年 1月 7 日（木）～8日（金） 上原古墳群及び上原古墳調査準備。

1月11日（月）～14日（木）／1月18日（月）～21日（木） 上原古墳群の調査 2台の重機により下層の土と混じらないよう耕土除去作業をし、トレッセ等をあける。その後遺構確認及び土層調査をおこなう。調査終了後、この地区は、ほ場整備までに一作ある為、各トレッセ水田耕作で支障をきたさぬよう転圧機械・重機で養生をしながら埋め戻し作業をおこなう。

1月25日（月） 上原古墳の調査 重機により下層の土と混じらないよう耕土除去作業をし、トレッセ等をあける。その後遺構確認及び土層調査をおこなう。

1月26日（火） 西側集石調査ならびに平面図作成。

1月27日（水） セクション図作成。

1月28日（木） 引き続き、セクション図作成および、全体図作成。

1月29日（金） 各トレッセ水田耕作で支障をきたさぬよう転圧機械・重機で養生をしながら埋め戻し作業をおこなう。

2月 1 日（月） 重機により、整地作業。

2月 5 日（金） 重機のキャタピラの跡が目立つため、鋤簾で整地をする。

2月16日（火）～2月25日（木） 地元の要請により、調査区全域をトラクターにて耕し整地をする。

2月 8 日（月）～3月19日（金） 平成10年度調査のまとめ。

平成 12 年 度

10月10日（火） 整理作業開始

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1. 遺跡の位置と地形

本遺跡は穗高町大字穂高のほぼ中央部にあり、現鳥川のつくった扇状地の中央部北に存在し、西は上原地区から東はJR大糸線の区域にある。標高590mあたりから東へ、傾斜19.1/1000の地形面上にある。ここには鳥川の過去の流路の移動に伴う扇状地性堆積地形が存在し、小規模な河川址が東西に走り、これを制御・利用した形で何本かの人工の開発沢を西から東に向けて流下させている。本遺跡内にある沢を挙げると、南より大坪沢、今井沢、藤塚沢、中沢、芝沢、本沢、古本沢、および三カ村堰である。開発沢の流れと堆積の方向はN55~80°Eが一般的である。

2. 遺跡付近の堆積層

本遺跡の堆積層は、発掘面や地層断面によってみると、一般的に地表部から

- I 黒灰色の耕土（水田15~25cm）
- II 黒褐色の鉄分沈殿層（2~15cm）
- III 暗黄褐色の溶脱層（10~25cm）
- IV シルト質暗黃灰色の溶脱層（10~50cm）
- V 黒褐色一部砂利混の腐植土（10~50cm）

の基本層を成している。南原遺跡では主としてI~V層の基本層であり、遺跡・遺物の包含層はV層に見られる。神の木遺跡、一本松遺跡、宗徳寺遺跡ではI~皿層以下の地層は洪水性の押し出しなどにより、砂礫の乱れた地層である。宮脇南の大糸線の西側の地層は、II層の無いものもあり、I層から下はII層やIII層、V層の上下が入り混じる複雑性を持ち、開発の新旧、洪水・氾濫の多少などを示している。そして、この地域いずれの遺跡も、扇状地堆積（氾濫原）の特性を色濃く持っている。

V層から下層は鳥川の扇状地性堆積物（主として硬砂岩、粘板岩、チャート、花崗岩で、安山岩を含まず）が厚く堆積している。ボーリング調査によると、この付近の地下の地層は4層に分かれ、上から層厚約25mまでの第1層は主として玉石混じりの砂礫層で、第2層は砂・砾の多い地層で、層厚は約25m、その下の第3層は、主として疊層で、層厚は120m程とされるが、ボーリングは底に達していない。その下は分厚な粘土層の基盤が想定されている。

3. 遺跡の立地

鳥川扇状地性堆積層に存在する本遺跡の中で、南原遺跡での遺物包含層はV層にあり、弥生、古墳、

奈良、平安の各時代の遺物の出土を見ている。古者の話では、南原は地が深く良い田の場所で、水の掛りも楽な場所という。等高線を追うと、その場所は西の方からの凹地になっている。ということは、かって古代までは自然流が存在していた可能性がある。開発沢が次第に開削され、住民が何れかへ移住し、その後の南原は良田になっていたということであろう。ここと比べ本地区内の他の遺跡は、出土品が少ない。地質、水、烏川の氾濫などの条件が大きく影響をしているのだろう。包含層もⅢ層の下、V層の下、砂礫層の下など複雑である。

本地域は典型的な扇状地で、自然流の場所や扇状地末端を除いては水が無く、開発沢の開削とともに開発が進んだ場所なので、多くは耕地（田畠）であり、遺跡調査は進んでいない地域である。

第2節 歴史的環境

1. 周辺遺跡

本地域は烏川扇状地扇央部、穗高神社の広い四至（神立て）内に位置し、その東側に穗高神社が鎮座する。穗高神社は三代実錄貞觀元年（859）2月、宝宅神として從五位上に昇進され、また延喜式では「名神大」として朝廷から奉幣を受ける大社で、安曇野の總鎮守として今日に及んだ社で、安曇氏の祖先として仰がれる穗高見命を奉祀する、土地に根ざした氏神型の神社である。本地域には、関連深い本郷区が含まれ、平安時代の遺物の出土を見た芝宮、神の木などの遺跡があり、さらに上原地区には有名な上原古墳（G1号）が存在する。

東に隣接の宮脇遺跡では弥生、平安、中世、また等々力町幅上・下遺跡では縄文、弥生、平安の遺物の出土を見ている。それに続く北才の神、藤塚、高校北の各遺跡では古墳から平安の各時代の遺跡・遺物の出土が確認されている。

さらにその南の矢原地区は、倭名録（931～937）所載の安曇郡八原郷に比定され、平安後期の矢原御厨とされている地域で、縄文から近世までの全時代の遺物を多量に出土し、全地区を遺跡包含地として指定されている。安曇野の開発・発展の中心の一つになった場所とされている。

また本地域の南には柏原沢の自然流があり、その支流を開削した諧沢によって、大坪沢、長者池、追っ堀、柏原、弥之助などの遺跡が存在し、出土数は少ないものの弥生から平安に至る各時代の遺物を出土している。またF古墳群が存在している。

なお本地域の西、山麓地帯は縄文中期の遺跡の多い地帯で、優れた遺物を多く出土している。

表1 遺跡地名表(番号は徳高町遺跡台帳による)

番号	遺跡名	縦文	弥生	古墳	歴史	番号	遺跡名	縦文	弥生	古墳	歴史
29	貝梅道上				○	46	矢原権現池				○
30	貝梅道下			○	○	47	三枚橋		○	○	○
31	辻			○	○	48	矢原五輪畠			○	○
32	一本松				○	49	矢原宮地	○			○
33	神の木				○	50	梅之地	○			○
34	宮脇		○		○	51	四反田			○	○
35	等々力町幅上幅下	○	○		○	52	正島	○			○
36	徳高神社境内		○			53	馬場街道	○	○	○	○
37	北才の神			○	○	54	矢原おふて池				○
38	藤塚			○	○	55	下原	○			
39	宗徳寺				○	56	八つ口				○
40	芝宮南				○	57	柏原			○	○
41	徳高高校北				○	58	中在地	○		○	○
42	大坪沢				○	59	堀之内			○	○
43	南原		○	○	○	60	矢原幅上			○	○
44	長者池			○	○	61	弥之助畠				○
45	迫掘				○	62	等々力城跡				○



第1図 周辺遺跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

1. 一本松遺跡・神の木遺跡・宗徳寺遺跡・南原遺跡の確認調査

これらの遺跡がある場所は、穂高町でも古くから有数の水田が展開する地域である。したがって畑作地や開発地であれば表面採集等で、ある程度遺跡の時期、性格がつかめるのだが、それが不可能であったため、これまでそれぞれの遺跡のデーターは皆無に等しかった。

1) 一本松遺跡・神の木遺跡

平成9年度基盤整備事業に先立ち同年調査を実施した。まずバックホーにより耕作土を除去した後、トレンチ法を主として（一本松遺跡では、一部平面的に広げている）約300m²の調査を実施し、埋蔵文化財の有無、包含層の深度等を調査し土層図作成を行った。そして、今回の基盤整備事業が遺跡に影響を及ぼすかどうかを判断した。

2) 宗徳寺遺跡・南原遺跡

平成10年度基盤整備事業に先立ち前年調査を実施した。宗徳寺遺跡については人力で、南原遺跡についてはバックホーにより耕作土を除去した後、トレンチ法を主として約400m²の調査を実施し、埋蔵文化財の有無、包含層の深度等を調査し土層図作成を行った。そして、翌年の基盤整備事業が遺跡に影響を及ぼすかどうかを判断した。

2. 担い手育成基盤整備事業 穂高西部地区内の開発沢の調査

この地域の開発に関与する開発沢が、何本か西から東に走り、遺跡の解明とともに開発沢の時代的・規模的解明が、この地域の開発の歴史を解く鍵となるものと重要視されている。今回は予備的調査として、沢を構成する地層などの状況を調査し、沢の規模、年代、流路の変化などを可能な限り知ろうとした。それに先立ち、基盤整備事業地域の地表を刻む沢の現況を踏査し、現在の地図への写しと古図との対比を行い、写真撮影をして、基盤整備事業により消え去る貴重な遺構を、記録として長く残すべく銳意務めるとともに、沢の形態、流路、土手、天井川などの大きさ、分岐の様子、曲がりの様子、地域との関係などを総合的に観察し、最後に解明されている遺跡との関連について調査を行った。

3. 上原古墳（G-1号古墳）及び上原古墳群の調査

平成11年度基盤整備事業に先立ち前年に調査を実施した。上原古墳の周辺には本古墳しか存在が知ら

れていなかったが、同じように扇状地扇央にある松本市秋葉原古墳、安塚古墳などは単独古墳ではなく付近に何基かの古墳が存在するため、上原古墳も同様の性格のものと考えられ、上原古墳群という位置付けがされていた。そのため上原古墳周辺に、バックホーにより耕作土を除去した後、トレンチ35本(約500m²)を設定し、付近に他の古墳が存在するか調査をした。また、現在ある上原古墳の範囲が明瞭ではなく、周溝等がある可能性があったため、古墳周囲にトレンチを設定し、範囲確認調査を行い、翌年の基盤整備事業において上原古墳の保存範囲を決める資料とした。

第2節 調査の結果

1. 一本松遺跡・神の木遺跡・宗徳寺遺跡・南原遺跡の確認調査

1) 一本松遺跡

江戸時代後期(1849年)に書かれた『善光寺道名所図会』に「ものぐさ太郎の墓」として掲載され、現在も松の大木とともに標柱がたたっている。そのため、当初中世の墳墓の可能性が考えられた。また、遺跡地図にもこのあたりから土師器の出土が報告されているため、平安時代の集落も想定した。まず、墓とされている場所の南側に東西トレンチを一本、東側に南北トレンチを一本設定し、部分的に拡張してみた。しかし現在の水田耕土約30cm下は、烏川の洪水性押し出しと思われる砂礫層(砾の直径大きいもので30~40cmを測る)が厚いところで80cm堆積していた。地元の人の話では、前述のとおり、この付近からは土器等の出土があるとのことだが今回の調査では、砂礫層を確認するのみであった。以上の結果から、江戸時代末から明治時代ころ大規模な烏川水系の洪水があったものと思われる。その際に「墓址」があったとするならば、流失あるいは埋没してしまった可能性がある。現在の「ものぐさ太郎の墓」と伝えられているこの場所は、洪水で場所がわからなくなってしまった後、推定地として標柱を建てたのではないかと考えられる。

2) 神の木遺跡

一本松遺跡調査箇所から南東へ150メートルの地点に位置し、ほぼ南北に6本のトレンチを設定した。その結果、調査区北側からは、一本松遺跡と同時期の洪水性押し出ししが現水田耕作面下約35cm(平均)に確認された。しかし、神の木遺跡の調査区中央部には砂利層ではなく、溶脱と沈殿層からなる水田面が、過去2面あり、②地点からは、現地表面下120cmに炭化物を多く含む包含層がみられ、140cm下には、住居址の床面も確認された。遺物としては、古墳時代と思われる土師器の小片が出土したのみであった。他のトレンチには遺物包含層はみられなかった。

以上の結果から、遺跡包含層は、現地表面下120~140cmにあり、今回の基盤整備事業では影響をうけないことが判明したため、確認調査にとどめ、本発掘調査は実施しなかった。

3) 宗徳寺遺跡

宗徳寺の西及び南西に2本のトレンチを設定した。その内、西側トレンチからは、現耕作面下50cmに炭化物を含む包含層が見られ、平安時代と思われる土師器の小片も確認された。

以上の結果から、遺跡包含層は、現地表面下50～80cmにあるが、この地区は現在の耕作面とほぼ同じレベルで基盤整備事業を行うことになったため、確認調査にとどめ、本発掘調査は実施しなかった。

4) 南原遺跡

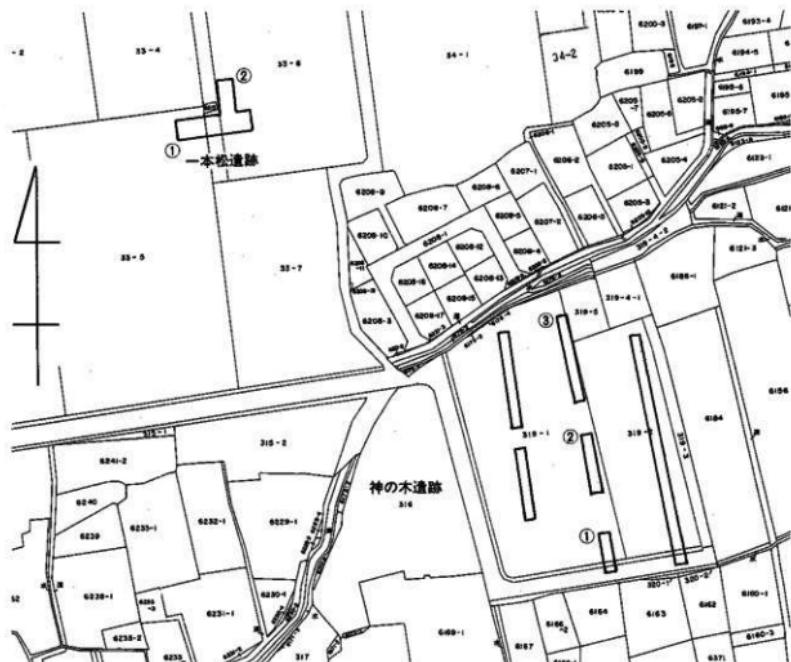
西部においては、溶脱と沈殿層からなる水田面が、過去1面確認された。また、藤塚沢・中沢を水源とする洪水性の押し出しも見られた。しかし、遺物包含層は確認されなかった。

東部においては、一番北よりのトレンチからは、洪水性の押し出し層が見られ、遺物包含層は確認されなかつたが、それ以外のトレンチからは、遺物包含層あるいは、住居址覆土が確認された。JR大糸線近くの⑥の地点からは、現地表面下25cmというごく浅いところから、炭化物とともに弥生中期の土器片が他の調査箇所に比べると比較的まとまって検出され、住居址の覆土も確認された（この水田は他の水田面より-50cmほど低い）。その他、弥生時代の住居址と思われる覆土は⑩の地点で現地表面下70cmから、弥生時代の土器を包含する地層は⑦の地点で現地表面下70cmから検出されている。なお、出土した弥生時代の土器の詳細については、別記する。古墳時代については、⑧、⑪、⑫のそれぞれの地点において現地表面下70～90cmで確認され、その内⑧・⑪は住居址覆土と思われる。奈良・平安時代については、⑨の地点において、平安時代後半の住居址床面が検出され、足の高い脚を有する土師器の小皿等が出土している。また、⑬の地点では現地表面下90～120cmからは、須恵器壺片、土師器壺片などが出土している。

以上の結果から、⑥以外は、包含層が深いため、今回の基盤整備事業では影響をうけないことが判明した。⑥の地点については当初発掘調査を実施する予定であったが、その後の農政部局との話し合いの中で盛り土により保存されることが決まり、発掘調査は行わないこととなった。



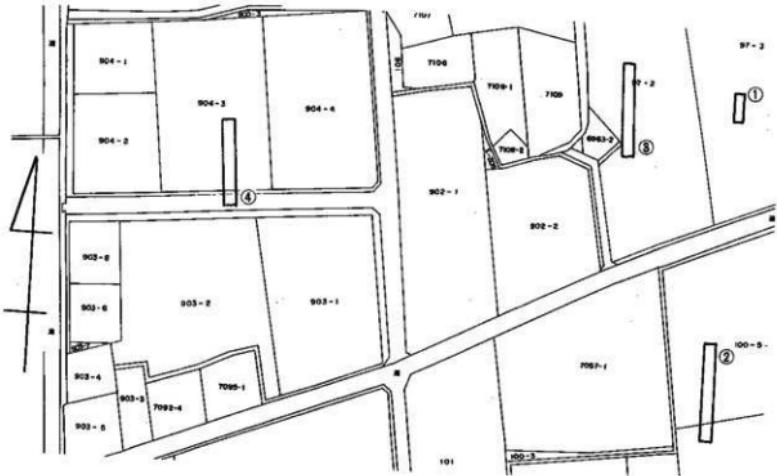
第2図 一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡調査箇所位置図（全体）(1:10,000)



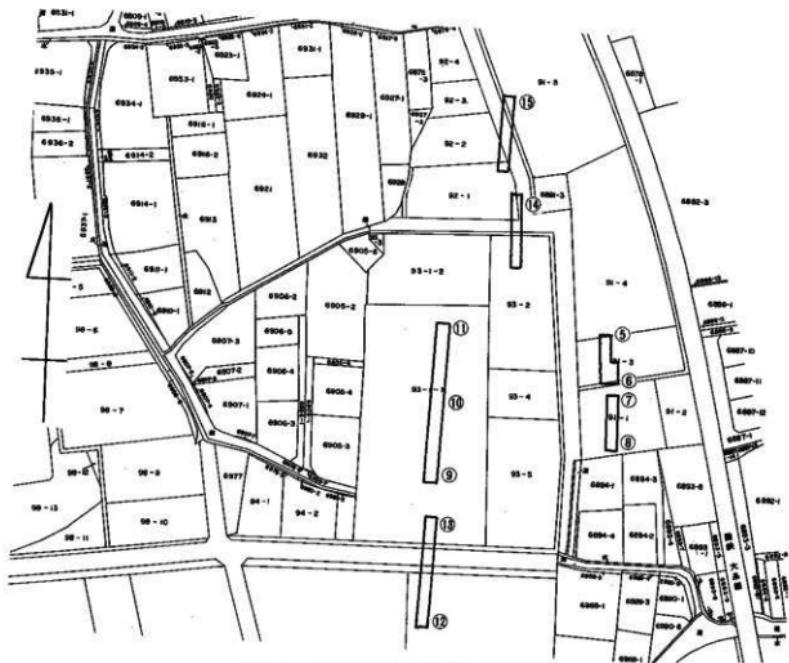
第3図 一本松・神の木遺跡調査範囲図 (1:2,000)



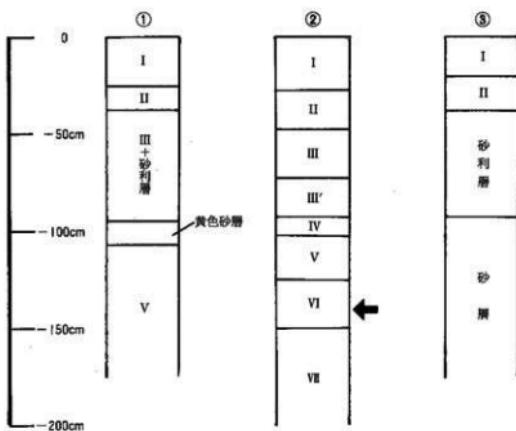
第4図 宗徳寺遺跡調査範囲図(1:2,000)



第5図 南原遺跡西部調査範囲図 (1:2,000)

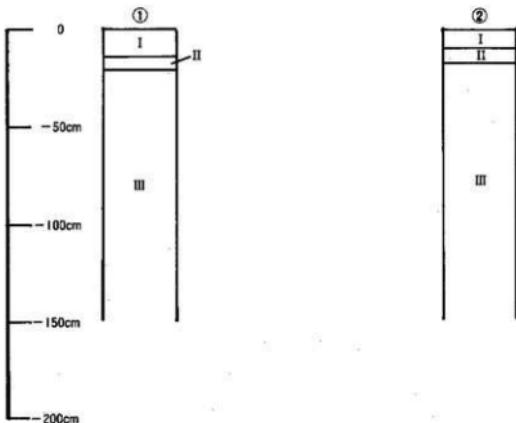


第6図 南原遺跡東部調査範囲図(1:2,000)



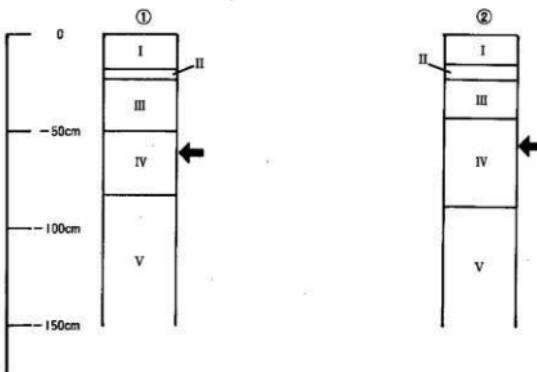
- I : 黒灰色土 (現在の耕土)
 II : 茶褐色土粒混入灰黑色土
 III : 茶褐色土
 III' : 糙茶褐色土
 IV : 褐褐色土 (比較層)
 V : 黄褐色土 (溶脱層)
 VI : 鉄化物混入暗黄褐色土 (住居址覆土)
 VII : 黄色シルト

第7図 神の木遺跡土層柱状図



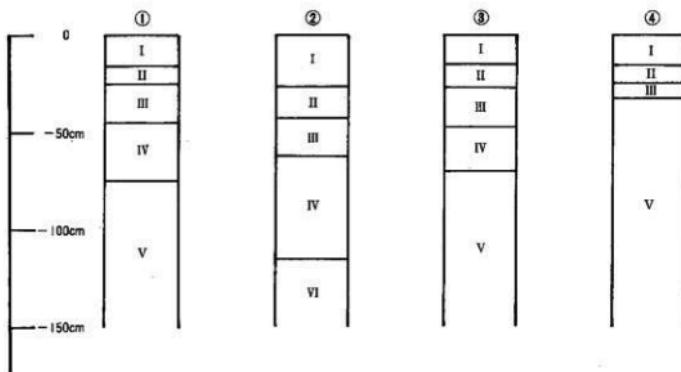
- I : 黒灰色土 (現在の耕土)
 II : 茶褐色土粒混入灰黑色土
 III : 砂利層

第8図 一本松遺跡土層柱状図



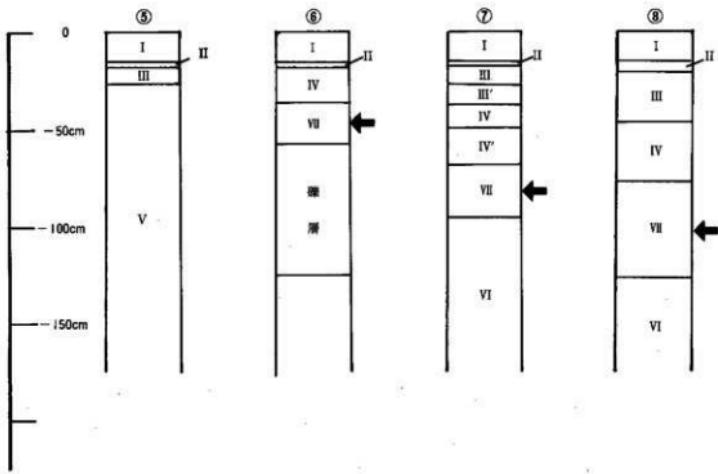
I : 黒灰色土（現在の耕土）
 II : 茶褐色土粒混入黒灰色土（鉄分沈殿層）
 III : 小礫混入褐色土
 IV : 小礫混入暗褐色土（遺物包含層）
 V : 洪水性押し出し

第9図 宗徳寺遺跡土層柱状図

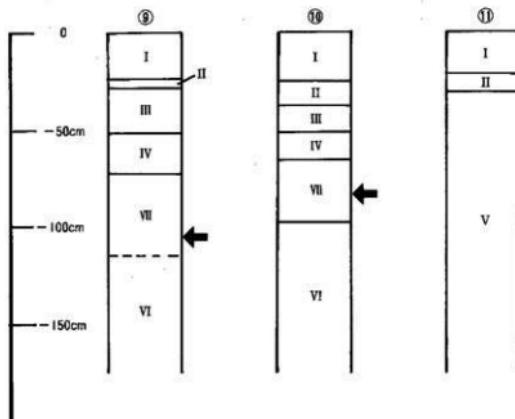


I : 黒灰色土（現在の耕土）
 II : 茶褐色土粒混入黒灰色土
 III : 喀斯特褐色土
 IV : 喀斯特灰褐色土（シルト質）
 V : 洪水性押し出し
 VI : 黄色砂質土

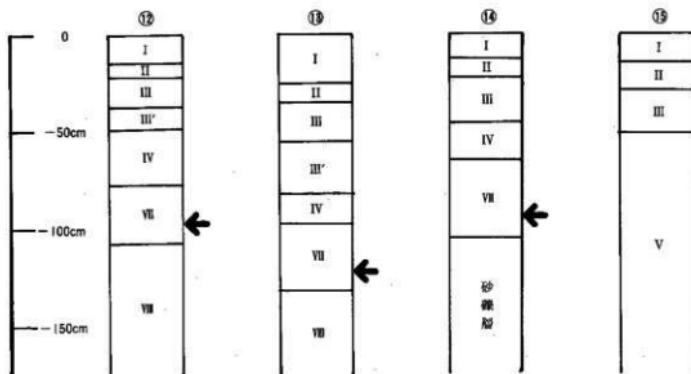
第10図 南原遺跡西部土層柱状図



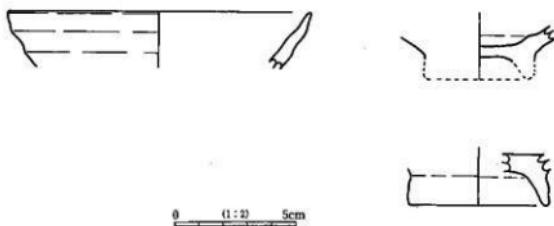
I : 黒灰色土 (現在の耕土)
 II : 茶褐色土粒混入黒灰色土
 III : 暗黃褐色土 (III'は小耕乱人)
 IV : 暗黃灰色土 (シルト質)
 V : 深水性押し出し
 VI : 黄色砂質土
 VII : 黑褐色土 (遺物包含層)
 VII' : 黄褐色土 (シルト質)



第11図 南原遺跡東部土層柱状図 (その1)



第12図 南原遺跡東部土層性状図（その2）



第13図 南原遺跡東部出土平安時代土器実測図

南原遺跡出土の弥生土器について

本遺跡からは弥生時代中期前半から後期にわたる土器片が多数出土し、なかでも中期中葉に帰属する在地条痕文系土器片はまとまりをもって出土した。弥生時代の土器出土は扇状地の微高地形成・利用時期を確定する上で重要であり、中期前半の土器そのものも希少であることから貴重な資料を得ることができた。

以下中期前半の土器から個々の土器について概要を記載した。

1～29は弥生中期前半に帰属する土器片である。いずれも小破片であるため器形全容及び器種は不明であるが、施文特長から器種分類を行った。文様では条痕文（3～9・19～29）、繩文（10～16）、沈線文（12～18）、刺突文（17）があり、3～4本を単位とする条痕文が多数を占める。器種は、1～18が壺、19～29が甌（深鉢）に分類された。

1～9は条痕文の壺口縁、胴部破片である。土器片の傾きと湾曲線状の条痕形状から壺に分類したが、甌胴部片の可能性もある。1・2は口縁部で1は東ねた棒状工具（条痕原体）で下部から刺突され、2は比較的太い工具により羽状に施文されている。3～6は2条単位の条痕が直線気味に、7～9は3条

単位の条痕が湾曲して施文されている。

10～18は繩文と沈線文を施文した壺である。10・11は頸部に位置する破片で、11の下部には横線文が見られる。両者とも内面には指圧痕が顕著に残る。12～16は肩部破片で12は重圓文の可能性が高い。17は刺突文を中心とする重菱形文が連続する壺頸部下半の文様であり、須和田式土器に特徴的な文様構成の一つである。18は重弧線文であり沈線文内に赤彩が観察された。10～18の内面はナデ整形で、焼成は堅固である。

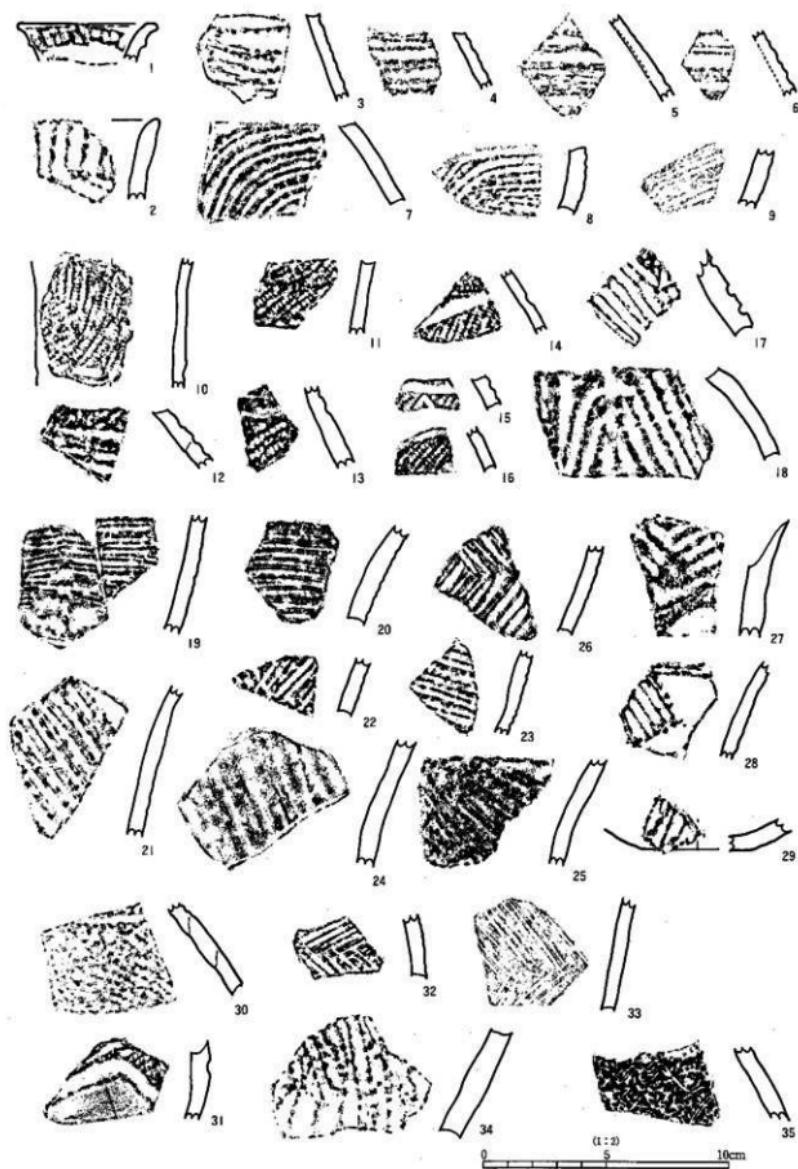
19～29は条痕施文の壺もしくは鉢である。器形は施文状況と破片部の傾斜から最大径を口縁に有し、頸部が屈曲する深鉢形態になると推測される。施文具は棒状もしくはヘラ状工具を束ねた原体が用いられ先端部が不揃いに分碎された痕跡が残る土器片も認められた。26・28・29は2単位、19・21・22・23は3単位、20・25・27は4単位の条痕で、2単位の条痕は比較的整った鋭い原体、4単位は比較的幅広で断面が長方形になる原体である。施文方向は、19・23は横位、20・21・22・24・25・29は单一方向の斜位、26・28は縦羽状、27は横羽状である。内面はナデ調整で、22・23・24・26には煤の付着が認められた。色調は明褐色から褐色、焼成は全体的に堅固である。

該期の土器群出土は、周辺では穂高町他谷遺跡、明科町綾ヶ丘遺跡、松本市横山城遺跡などに見られ、中期前半から中葉の庄之畑・阿島式段階に並行する時期である。

30～34は中期後半の栗林式期に帰属する。30・31は壺、32～34は甌であるが、個々の器形全容は不明である。30は無花果形の肩部に位置する破片で、幅広い繩文と上部に横線文による区画施文がある。中期後半期のなかでも施文範囲の広い古い段階の文様構成を示す。31は球胸形の胸部下半に位置し、繩文と半円弧区画が施文され、文様下部にはヘラミガキが残る。整然としたミガキ整形は前記した中期中葉には見られない技法である。32・33は胸部中位に位置する破片で、横羽状の櫛描文が施文されている。33は4本単位の櫛描文で、胸部が脹まない深鉢形態と推測され古い段階の器形である。34は底部付近の破片でヘラ状工具による強いナデ痕があり、内面には顕著な凹凸が観察された。該期の土器胎土は比較的緻密で、焼成も堅固である。

35は弥生後期後半に帰属する甌の肩部破片である。ハケ整形後に7本単位の櫛描波状文が粗雑に施文されている。胎土は中期土器に比べ、砂礫がやや多く含まれている。

弥生時代の遺構は未確認であったが、県内でも中期後半と後期後半は集落が拡大する時期であり、本遺跡及び周辺に集落関連の遺構が存在する可能性は極めて高い。



第14図 南原遺跡東部出土弥生土器実測図 (30は地点④、その他は地点⑤)

2. 穂高西部地区内穂高沢水系開発沢の調査

この地域は、穂高神社の広い四至（枠立て）の一部とされる場所で、古代からの由緒ある地域である。そして数ヶ所の遺跡及び遺物包含地が含まれている。

またこの地方の開発に関与する開発沢が、何本か西から東に走り、遺跡の解明とともに、開発沢の時代的並びに規模的な解明が、この地域の開発の歴史を解く鍵となるものと重要視されている。

今回は予備調査としての試掘を実施し、沢を構成する地層などの状況を調査し、沢の規模、年代、流路の変化などを可能な限り知ろうとした。それに先立ち、本地区の地表を刻む沢の状況を踏査し、現在の地形図への写しと古地図との対比を行い、現状の沢の水路の写真撮影をして、基盤整備により消え去る貴重な歴史的足跡を、記録として残すべく鋭意努めるとともに、沢の形態、流路と土手、天井川などの様子、分流の様子、流路の曲がりの様子、流域との関係などを総合的に観察し、最後に解明されている遺跡との関連について考察を行った。その結果

- ・この地域の開発沢の灌漑地域は、初期は東端の低地帯に集中し、次第に北・西部へと広がっていったものと推定出来た。開発の進展、集落の発展とも軌を一にしている。
- ・沢の流路の様子（分岐、向き、幅）などより、開削の早晚、年代を推定してみた。
- ・10世紀前後の大荒れで、微地形が変化し現在に至ったといわれるが、現在の開発沢への関与についての課題が残った。
- ・近世の横堀開削による、源流開発沢の変貌は相当激しく、消滅、縮小、拡大と変化している。
- ・今後の調査・発見による新しい視点での解明が期待される。

I 今井沢

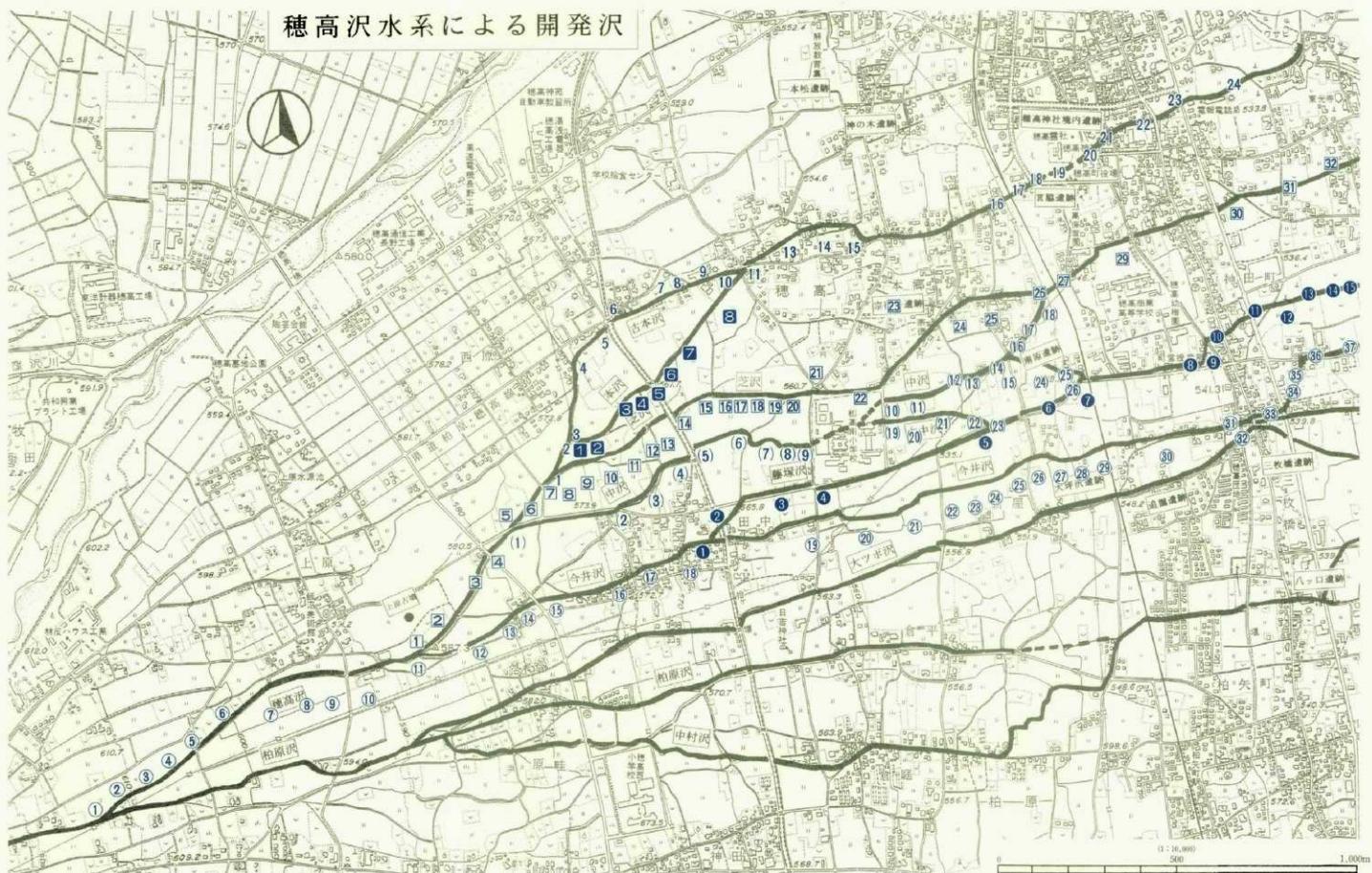
古代からの開発沢の源流柏原沢（自然渓）は、上流で今井沢を分流する。現在は穂高沢（本沢）となつたが、当初は今井沢を分流したと考えられる。それは、この沢の形態が上流では自然な弧状を成して流れ下るからであり、下流の開発が年代に添うからである。

柏原沢が、低地を自然に大きな土手を形成して流下しているのに比べ今井沢は、小段丘上を東北東方面に、等高線にやや斜めに導水している。そして大きな天井川となって上原集落の南側を下り、上原古墳（G1）南をほぼ東に向けて流れ下り、田中集落の真ん中を突っ切って東流する。見るからに大きな古い沢であり、しっかりした管理沢の様相を示している。

等高線で確かめてみると、田中集落まではむしろ微高地を流れるが、それより下流は低いところを、ほぼ一直線に追掘沢に向けて東流している。この川も、下流の低地追掘沢に向かう自然流の流路の利用と見られるが、上・中流の姿は人工沢の感じが強い。田中集落の西端に、古墳時代末期と見られる古墳があった事実があり（保尊和夫氏）、今井沢の鎮めか。

下流の追掘沢の頭の所で今井沢は北東向きに流れを変え、白金集落を北回りで囲むようにして灌漑しつつ、小万水川に流れ込んでいる。こうしてみると今井沢は、まず白金集落付近の開発沢と見ることができる。白金耕地の西が藤塚遺跡（7世紀）であり、白金耕地は矢原東北部の開発（6世紀）に次いで行われたと考えたい。この耕土は30cmと深い（小穴喜一氏）。また今井沢は、田中集落の東端近くで藤

穂高沢水系による開発沢



第15図 穂高沢水系による開発沢

塚沢を分流している。

上流域の上原の開発は近世であり、中流域の田中の開発も、穂高町誌のいう「今井沢は田中を開発し、末流は白金に達した」というよりも、むしろ白金を中心とした地域を開発するために今井沢を開発したと考えたい。田中集落の東方今井沢流域は低地で、早く開発される条件を備えていると思われるが、重点はそれより下流の開発としたい。白金集落はその北部に広い低湿地を擁し、稻作の適地で、白金の地名も「代かきね」よりきたとする小穴喜一氏の見解もうなずける地域である。

今井沢を田中沢とも呼ぶのは、田中の真ん中を通る沢のため、後世便宜的に名付けたものであろう。今井沢の語源は何であろうか。松崎氏の「長野県の地名」によると、「今」は「若」と共に新しいという意味で、子供、分ける等のときに使われる。今宮、若宮もその意味である。「今井沢」の「井」は「水」の意味だから、水を分けた沢という解釈になる。柏原沢から一番先に分流された大きな沢が今井沢である。

今井沢が、古く自然流の可能性があったとすれば、その流域に遺跡の存在する可能性もあり、今後の調査結果が期待される。

G群の上原古墳、田中古墳の立地は今井沢と芝沢（本沢）の分歧点にあり、古墳の年代が7世紀とされているので今井沢の年代の古さが想像できる。

II 藤塚沢

今井沢は田中集落の東端付近で藤塚沢を分流する。藤塚沢は北東に進んだ後、やがて今井沢にほぼ並行して東流し、三枚橋と神田町の境付近で藤塚遺跡の中を通り、白金集落の北端、等々力集落の南を東流する。この末端付近は基盤整備され、立派な水田であるが、昔は広い低湿地であり、近世まで数多くの池が残っていたという。

この西方、藤塚遺跡の周辺開発のため引いたのが藤塚沢であろう。藤塚遺跡は7世紀前半であるから、矢原東北部開発から引き続いて北、西へと次第に進んできたと推測できる。藤塚遺跡には一部に70cmに達する耕土地帯があり（小穴喜一氏）、古い開発を示している。

ここで鳥川からの水を導水し、開発に伴って次第に分流していく様を想定してみたい。

- ・自然流柏原沢は、ほぼ直線的に真東に凹地を流れ下る。矢原の開発。
- ・大っぽ沢は、柏原沢の中流の上あたりから分流し、しばらくは人工沢の様相が強いが、中・下流は自然流の流路跡を辿る形で東流し、矢原北部の開発。
- ・今井沢（本沢）は、柏原沢の最上流で分流し、小段丘の上を北に引っ張る形で曲がり、後大坪沢に並行して東流する。田中で分流した藤塚沢とともに、白金・藤塚の開発。
- ・芝沢は、今井沢の上流で分流して、本郷の南部地域を開発する。
- ・古本沢・本沢は芝沢より分流し、本郷集落へ導水する。

III 中沢・古中沢

上原古墳の南で今井沢から分かれた芝沢は、流路を更に北東に替え、大きな土手を伴い、天井川を成して流れ、やがて中沢を分流する。この分流の様子はT字形に近い分岐で、幹線からの分岐の様相である。芝沢が先で、中沢が遅れての分流である。

分流した中沢は、やや広い流域と天井川を形成して東流するも、芝沢に比べて大分見劣りがする。中沢は、南側に東流する今井沢、藤塚沢と、北側を東流する芝沢とのほぼ中間を東流し、田中集落の北及び本郷集落の南西部を灌漑し、二つに分かれ中沢・古中沢となって流下する。この付近は耕土30cmで深く、水の掛りのよい良田である。ここに南原遺跡がある。弥生から平安時代にかけての遺物が出土している。

中沢の中流から下は凹地が続くところから、古代までは自然流の存在が考えられる。遺跡の存在がそれを物語っている。

この二つの沢は、やがて大糸線の西で中沢は芝沢へ、古中沢は藤塚沢へ流れ込んでいる。

IV 芝 沢

上流で中沢を分流した芝沢は、やがて東に向きを変えて、大きな土手、天井川を形成して東流する。芝沢は沢筋形態が大規模で、用水路とは考えられないほど高い堰土手であったといわれる（穂高町誌）。東流した芝沢は芝宮に達し、ここから流れを分けて、芝宮地籍を広く灌漑し、穂高本郷集落の南側を東流し、道下集落の下で中沢を入れ、宮脇集落を通って神田町に入る。この流域には歴史時代の遺跡が存在する。現在の沢は宮脇集落の所で北に流れを変え、穂高神社の南で本沢に合流するようになっているが、本来は、穂高町誌で指摘するように、真っ直ぐ東流し、神田町を経て等々力集落の柳下（やなした）堰に行くのが本流とされる。穂高校の校門付近は、矢原堰の流路が西に湾曲し、等高線上も低地であることを示している。柳下堰もやはり低地を東流していて、まさに芝沢の末流がここまで達したと認められる。

芝沢は藤塚開発に統く開発沢である。等々力、神田町、宮脇、芝宮・本郷の開発をしたものであろう。芝沢の名称は、芝宮への水路からであろうか。矢原の穂高沢が、北村にある元宮（今は白山さま跡地への水路）であることが想い出される。ともあれ芝沢、現在の穂高本郷を中心とする集落発展の中核である。

* 芝沢の場所とされている所から白砂の出土があったという。山田実氏は穂高大明神の元宮・遙拝所ではないかとされた。

* 穂高校の西に、かつて「やづか」があって、大きな藪になっていた。昔はこの付近は多く等々力区の者が耕作者・所有者ようで、芝沢との深い関係がうかがわれる。

V 本 沢

本沢は、芝沢から分流した幹線の古本沢から、T字形に分流している人工沢である。北東寄りに流下し拾ヶ堰に入るが、それまでの水路は現在消滅寸前である。しかし分流点では大きな堰土手を残しており、当初は堰下の沢のように、大きな沢であったことが知れる。拾ヶ堰から下は深く幅広な水路となつて流下し、本郷集落の西で古本沢に合流している。

地元の伝承では、本沢は拾ヶ堰が出来たとき開削され、それ以前は古本沢であった（保尊和夫氏）という。しかし現地分岐点の堰土手砂礫の山は本沢のものと考えられ、拾ヶ堰開削以前に本沢が存在した可能性もあり、結論を後に残した。

穂高町誌の水路図では、本沢は芝沢から分流されているが、土手型のみでは確証が得られない。それに比べ、古本沢からの分流は、大きな分流箇所での堰土手があり、蛇行した流路が東流して拾ヶ堰につ

ながっている。近年まで拾ヶ堰渇水期には樋で本沢の水を渡したという。

本沢は古本沢とともに、本郷集落の用水・灌漑水であって、重要な沢である。古本沢の後、補水目的で本沢を開削したものと思える。

VII 古本沢

芝沢の頭で古本沢が分流する。流路を相当北へ向けて流している。本郷集落への導水にしてはやや不自然である。きっと北に自然流跡（今の三ヶ村堰のあたり）があって、そこへ向けたかもしれない。古本沢は芝沢から分かれしばらくして本沢を分流する。そして北上を続け、東へカーブして拾ヶ堰に入る。この付近は低地で、地形的に無難な所を流れる沢である。本郷集落までは一直線に真東にながれ、本沢と合流する。そして集落内に入り、用水の役目を果たしつつ東流、やがて穂高神社に達する。この沢は穂高沢にふきわしい沢といえる。神社の南から北東に向きを変え、境内を斜めにかすめて東流、真っ直に流れて次の川（蛇掘川）に落ちる。

古本沢、本沢は大切な灌漑流域をもち、本郷集落の用水を担い、穂高神社の禊川でもあるところから、もっとも古い本来の穂高沢といわれていた。上流の各沢の分流の様子、各沢の姿、遺跡の分布状況、遺跡の年代等より、開発沢開削の歩みを模索すると、どうしても柏原沢より北へ進む一連の歩みが自然と思える。本沢・古本沢は、一連の最後の開発沢であって、この沢の開削によって穂高本郷の基盤が確立し、やがて穂高の本郷になっていくと考えたい。

- ・古代千国街道が開通するのが8世紀前半。
- ・信濃国宝宅（穂高）の神が從五位上に上がるのが9世紀（859）。
- ・延喜式に穂高神社、名神大とあるのが10世紀（905～）。
- ・穂高本郷の遺跡をみると、弥生・古墳を経て、平安の各時代に至る遺跡が存在する。しかし今のところ、多くは平安時代以降と見られる。

これらのことから、穂高本郷近辺の本格的な開発は、早くても8世紀、主体を成すのは9世紀以降とてはどうか。6世紀に大きな集落に発展した矢原の開発は柏原沢を分流する開削の輪を次第に広げ、7世紀には藤塚地区に達し、更に北方・西方へと広がっていく。そして中心勢力は本郷周辺に定着し、穂高の神が祀られる祭政一致の古代の姿を想定したい。

I

柏原沢から
今井沢（穂
高沢）へ



① 柏原沢から今井沢へ。島川橋付近から取り入れられた自然流の柏原沢は広い河川敷をもって東流し、ここで穂高沢を北方へ分流する。



② 柏原沢と穂高沢の分流点。二つの沢は、ここで等分に背割りして流される。柏原沢が真東へ凹地を流れると比べ、穂高沢は微高地へ導水されて人工的・管理的な沢となる。



② 穂高沢の旧流路。広い河川敷をもって蛇行していることが知られる。広い所で5尺、狭い所でも4尺はあり、沢岸にはハンノキ、ヤナギの杭を打って護岸した。



② 穂高沢の広い河川敷。旧流路が南側に残っている。
(向って右)



③ 広い河川敷を残す穂高沢。U字溝は戦後昭和30年代の工事である。



③ 広い河川敷を残す鶴高沢。大きな澤が多く、瀬の強さを物語る。年に何度もの沢ざらいをして土砂を上げた。



④ 北側に残る旧流路。



⑤ 天井川になっている鶴高沢



⑥ 広い流路土手が上原集落の南へ続く。



⑦ 上原集落へ分水する鶴高沢。



⑧ 上原集落へ分水する鶴高沢。



⑧ 大きな天井川となって、東流する穂高沢。
2 m 以上の高さの土手が長い期間の管
理を物語っている。



⑨ この下で天井川は打ち切られ、平地へ
戻されて東流する。



⑩ この下で今井沢（穂高沢）はなだらかにカーブして、
田中集落に向う。古い地図では本沢は今井沢が最初
の沢と知れる。現在は道路敷の改修で本沢が優先し
ている。



⑪ 今井沢は田中集落へ向って東流する。



⑫ 今井沢と本沢の分岐点より北方、上原古墳を望む。



⑬ 上原古墳。7 C後半～8 Cの古墳とされる。分岐
点の要の位置に鎮座したものと思われる。



⑫ 東流する今井沢。



⑬ 田中集落に近づく今井沢。天
井川の土手幅 5 m 以上で大
きな沢だったことが知れる。



⑭ 大規模農道を横切って東流する
今井沢。天井川はやはり規模が
大きく、古くからの管理沢であ
ったことが知れる。



⑮ 田中集落の北側を東流する今井沢。



⑯ 田中集落の北側を東流する今井沢。右岸少し離れて
田中古墳があったとされる。土手幅 4 m 位。



⑰ 田中の集落の中を流れる今井沢。集落に
よって流路は変っていると思われる。



⑱ この付近で藤塚沢を北東へ分流する。



㉑ 田中集落を出て東流する今井沢
(田中沢) 広い河川敷をもつていい
る田中の集落を通るので、田中沢
の名でも呼ばれる。



㉒ 古い流路の姿で
東流する今井沢。



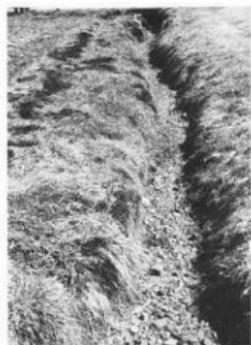
㉓ 蛇行する今井沢。蛇行する流
路の姿は、その古さ、自然さ
を物語る。



㉔ 蛇行いちじるしい今井沢。



㉕ 新屋集落の西を東流する今井沢。



㉖ 広い土手を伴い、沢床を小石が
敷きつまつて東流する今井沢。



㉗ 広い土手を確保して、
東流する今井沢。



㉘ 今井沢の流路は、次第に低地
を流れようになる。天井川
の姿は薄れる。



㉙ 広い流路域を保って、東流
する今井沢。



㉙ 道の下で二つに分岐する今井沢。北が今井沢本流。



㉚ 3m以上の大河川敷をもって東流する今井沢。



㉛ 千国道を横切る今井沢。



㉜ L字溝や舗装道路に囲まれて東流する今井沢。



㉝ 東流する今井沢。



㉞ 大糸線を横切る今井沢。



㉟ 今井沢は東流して三枚橋に近づく。



⑩ 矢原堰に入る直前に南にカーブする。



⑪ 矢原堰に入る今井沢。南にずれて落ち口がある。その南を大つば沢が並行して東流する。中央の水門は今井沢のものである。



⑫ 矢原堰から東流する今井沢。



⑬ 大つば沢（南）と平行して東流する今井沢。ここで今井沢は、北東に向きを変え、おっぽり沢の頭に向う。



⑭ やがて、国道と交叉する今井沢。流路は古くは、直に追瀬沢に向っていた。おっぽり沢は「払いマチ」である。



⑮ 国道を越して、北東へ向う今井沢。



⑯ 北東に流れる今井沢。広い土手幅を確保している。



⑰ 北々東に流れる今井沢。



⑩ 白金道路に向う今井沢。



⑪ 白金道路を東流する今井沢。



⑫ 前方、白金集落を目指す今井沢。



⑬ オッポリ沢の頭で、北東に向きをかえて、流下する今井沢は、ここ地字「窓田」の手前で東に向きを変え、直に白金の本郷へ向う。この道路の北側は、低湿地帯であった。



⑭ 東流する今井沢の西背後には、真正面に崇高ともいえる常念岳（徳高岳）が鎮座する。



⑮ 四叉路を経て、白金集落の本郷に向う、この今井沢を藤塚沢とも呼ぶが、藤塚沢の川尻の一部がこの今井沢に入るからであり、正しくは、今井沢といっている。



⑯ 四叉路の南西が、地字「氏神」で、白金の氏神は古くはここにあったとされる。



⑰ 白金の八幡宮である。この社の北側を今井沢は流れている。



④ 御神木の杉の古株である（白金神社）。



④ 社の北側を東流する今井沢。この集落の大切な用水である。



④ 白金の主道は、ここで右折（南向き）するが、今井沢は直に東へ向う。この先が大土手と呼ばれる段丘である。



④ 相馬愛蔵（黒光）氏の邸の南を、段丘を削って幅下へ急流となって下る今井沢。



④ 急流をなして、幅下へ落ちる今井沢。



④ ここが段丘の麓であるが、最近までは、湧水があって、ワサビ畑であった。相馬黒光女史の水汲みの場所はここであつとされる。

II

藤塚沢



❶ 十ヶ堰の上で、今井沢から分れて北東へ向う藤塚沢。今は、流路は消えているが、敷地境が斜めの旧河川を物語る。現在、広場にもなっている。



❷ 十ヶ堰を越して北東に流れ
る藤塚沢。新しい取入口が
できている。



❸ 道路に添って東流する藤塚沢。



❹ 穂高南小の南を道に沿って東流
する藤塚沢。道は、沢に沿って
開かれたものであろう。



❺ 東流する藤塚沢。ここで、古中沢
が北西から流れ合流している。



❻ 北東にカーブして、やがて中沢を合流する。



❶ 大糸線を横切って東流する藤塚沢。



❷ 矢原堀へ入る直前で流路を北東に変える藤塚沢。ここから東流して、今井沢へ入る流路も考えられる。



❸ 矢原堀に向う藤塚沢広い流路域を保っている。



❹ 旧国道を横切って、東流する藤塚沢。



❺ 新国道を越して東北東方向に流れる。(ホンダベルノの南)。



❻ アミーの北を東流する藤塚沢。



❼ 沢沿いのハンノ木。かつての湿地帯(地下水位の高い)を物語る。



❽ 等々力集落の南へ東流する藤塚沢。古くは、この辺りから低湿地帯で、沢は放流されていたものであろう。



❾ 更に東流して、等々力集落近くを、低湿地に向う藤塚沢。

III

中沢・古中沢

—中沢—



(1) 本沢(芝沢)より分流する中沢、向って
左 芝沢 右 中沢

中沢は道路に沿って東流する。古くは沢に沿っての道があって、その道が拡幅されているものであろう。



(2) 本通りの道から分かれて東流する中沢広い土手(天井川になっている)を持っている。その土手が拡幅されて、道路敷になっている。この道路のほぼ中央に沢の流路があったものであろう。



(3) カーブして十ヶ堰に向う中沢広い土手
(天井川)が残るこのカーブの北側が旧
流路で、三日月型に残っている。



(4) 十ヶ堰に落ちる中沢。小さな落ち口で、
現在は「払いマチ」程度になっている。



(5) 十ヶ堰を渡って深い流路が東流
する中沢十ヶ堰のカサ上げでの
結果であろう。



(6) ガラ石の土手となっている。その上を草の根
が覆う程度の流路。川底の石敷が美しい。



(6)' 東流する中沢。土手幅 4 m 以上
の広い河川敷を保っている。



(7) 蛇行する中沢。流路は深い。
石積みの土手もある。



(7)' まわりの水田は昇り掛け口のため並行し
て水口への導水溝が造られている。護岸
のヤナギの古株が多くある。



(7)" 中沢中流からの常念岳の眺め。



(7)"' 東流する中沢。穂高南小の敷地へ近づく。



(7)'' 広い流路域の中沢。



(8) 自然に近い沢の姿を留める中沢。



(8)' 自然に近い沢の姿を留める中沢。



(8)'' 蛇行の著しい中沢。



(9) 稲高南小に近づく中沢。



(9)' U字溝にされた中沢。やがて稲高南小の敷地に入ってしまう。



(10) 稲高南小の敷地を出て東流する中沢。



01 東流する中沢護岸のヤナギ、
玉石敷。



02 野趣に富む中沢の流路。



03 天井川を形成する中沢。この南一
帯が南原遺跡（弥生中期～平
安）



04 塚付近で分岐する中沢。



05 分岐して南東へ向う中沢。（藤塚沢へ向う）



05' 分岐して北東へ向う中沢。（芝沢へ向う）



06 北東へ向う中沢。



07 芝沢への合流に向う中沢、
広い土手幅を保つ。



18 やがて芝沢へ合流する中沢。



19 中沢南支流、東南東へ向けて藤塚沢へ。



20 やがて藤塚沢へ合流する中沢。

21 中沢南支流、藤塚沢へ合流道路側
のコンクリートの蓋のところが流路。

—古中沢—

最初の中沢が古中沢で、後に今の中沢が分流したものである。灌漑域は新しい中沢の方が広いので、大きな沢となっている。

分岐点は穂高南小の敷地内東側にあった。

古中沢の流路周辺が南原遺跡である。

19 古中沢は、南小の東端から、
古相をもって東流する。

20 東流する古中沢護岸のヤナギの古木が奥ゆかしい。



20 古中沢の流路。



20" 東流を続ける古中沢。



21 古中沢は、この先で向きを南東に変える。



21' 自然に近い流路は、あたたかな味を持つ。



22 古中沢は南東へ向きを変え藤塚沢へ向う。



22' 古中沢のU字溝。



22" 古中沢、間もなく藤塚沢へ合流する。



22" 藤塚沢へ向う古中沢。
向って右が流路。



23 藤塚沢に入る直前の古中沢。



23' ここで古中沢は藤塚沢へ合流す。

IV 芝 沢



① 今井沢から北へ分流する本沢（芝沢）。古図に見る如く、今井沢はもっと手前からなだらかなカーブで東流している。



② 今井沢から分かれて東北方へ向へ流れる芝沢（本沢）広い土手幅をもつ天井川。



③ 大型農道を渡る芝沢。



④ 芝沢（本沢）は大型農道を越して、一路東北方向へ。



⑤ 田中への道を越して中沢を分流し、東北方向へ流れる芝沢。



⑥ 芝沢（本沢）の流路。ここより石積みの水路となる。これは昭和27、8年頃伊藤組によって石積みされた。



⑥ 大土手を形成して北東へ流れる芝沢（本沢）、流路は烏川の粘板岩の平石を用い、底はカメ張り、側は3～4段積み。



⑦ 芝沢は本沢との分流点に近づく。



⑧ 芝沢はゆるやかにカーブして東へ向う。古本沢はここで北に向う。



⑨ 東流する芝沢。大きな土手（天井川）となつており、重要な沢が裏付けられる。



⑩ 東流する芝沢。



⑪ エノキの大木に近づく芝沢。



⑫ エノキの古木。



図10 エノキも過ぎて十ヶ堰を望む。基盤整備の下層から2~3本の古い流路が表われた。



図10' エノキの北側。かつての「払いまち」であったろう。



図11 エノキの下(南側)を東流する芝沢。



図12 十ヶ堰に近付く芝沢。十ヶ堰の開削で上流から用水の必要が大幅に減る。



図13 改修された十ヶ堰。芝沢はここでより用水を東流させる。



図14 東流する芝沢。広い天井川をもっている。



図5 北へ支流を出す芝沢。
右(南側)が芝沢本流。



図6 広い河川敷と天井川を伴って東流する芝沢。長い管理の歴史がこの沢を支えてきた。



図7 自然に近い流路の芝沢。



図8 蛇行する芝沢。



図9 沢床の川石。



図10 蛇行の美しい芝沢。沢沿いの樹木、ハンノキ、ヤナギが多かつた。



図11 広い河川敷の芝沢。



20 沢端のハンノキや灌木の育つ芝沢。



21 本郷集落へ向う芝沢。



22 芝沢は宗徳寺の東側へ向う。



23 宗徳寺の北裏を東流する芝沢。



24 合流した芝沢は東へ向う。



25 東流する芝沢。道路の側溝となっている。



26 大糸線の踏切りの直前で、南から流下してきた中沢を入れて、踏切りへ向う。右手前が中沢。



図 宮崎集落の南に達した芝沢。現在は北へ曲げられて北流しているが、本来は真直に東流していたもの（中央の道）。



図 穂高高校の前の芝沢。
矢原堰と変わる。



図 芝沢はこの辺から「柳下堰」と呼ばれている。



図 地字「屋敷添」を東流する柳下堰。古老は芝沢の末流という。



図 町道を越して東流する芝沢。



図 屋敷添のはずれで放流された芝沢。



図 等々力集落の幅下での放流。



図 芝宮に到着した芝沢。ここで西と東の2本に分かれる。



図 東へ進んだ芝沢。

V

古本沢

1 東北東方向に流れる芝沢からほぼ真北に流路を分岐する。この形態からも芝沢が当初の開発沢という推論が成り立つ。分流された古本沢（古本沢）は大きな天井川を保って北流する。しっかりした管理流路をもっている。



1' 古本沢（本沢）のよく管理された流路。敷き詰められた粘板岩の平石のカメ張り。



2 古本沢を東へ分流したあと北流を続ける古本沢。川底は敷石、側壁は3段の石積み。



2' 北上する古本沢ほぼ等高線に添って真北に流れる。



2'' 古本沢の東側に十ヶ堰が並行する。



2''' しっかりした管理水路の古本沢。戦後27・8年頃、伊藤組によって流路が石積みされた。烏川の粘板岩の平石を使って、底はカメ張り、側壁は3～4段石積みの見事な流路である。



3 程度く摩耗されている古本沢。40年以上経った現在も、立派な流路の役を果している。



3' 三ヶ村堰を合流させて
いる古本沢。ここから
北東に向きを変える。



3'' 広い沢土手を伴って本郷集落へ向う古本
沢。向って左端三ヶ村堰との合流点。



4 蛇行する古本沢。住宅団地が迫っている。



4' 住宅団地に囲まれた古本沢。かつ
ては荒地であった場所という。



5 古本沢はやがて
十ヶ堰に落ちる。



6 十ヶ堰よりの水門を経て東流す
る古本沢広い土手を伴っている。



7 広い沢土手を伴って東流する古本沢。こ
こは低地でケミの様相を呈していた場所
であった。



8 U字溝に改修され
東流する古本沢。



9 本郷集落の西端に
達する古本沢。



10 古本沢と本沢との交流点。向って
右 本沢(南側)
左 古本沢(北側)



11 古本沢と一本化した本沢は本郷集落
北側に入り、東流する。



13 本郷集落の北側を東流する本沢。大
きな天井川を形成していて古くより、
良く管理してきたことを物語る。



14 本沢の天井川の土手は道路敷とな
って、水路は側溝となっている。



15 本郷公会堂の東で道路に出る本沢。
ここより徳高神社の南側への導水
が図られいたのだろう。



16 大糸線と交叉する本沢。穂高神社
神域の南西隅が望める。



17 現在は、本沢の流路は道に沿って直に東
流しているが、古くは神域の西南隅から
北東に流れていたという。



18 古い流路が神域内の南西
隅の池に残っている。



19 神域の池に通ずる古い
水路（本沢）。



20 矢原堰から水門を経て
東流する本沢。



21 JA倉庫の北側を
東流する本沢。



22 旧国道を東へ横切る本沢。



23 新国道を横切る本沢。



24 欠の川へ放流される本沢。

VI 本 沢



■ T字形での分流の本沢。古本沢よりの分流とわかる。



■ 大きな天井川の土手を伴って東流する本沢。



■ 広い沢土手のみを残す本沢の河川址。十ヶ堰の開通により堰の西側の本沢が不用となる。



■ 広い土手のみで十ヶ堰に落ちる本沢。



■ 十ヶ堰から東流する本沢。深く大きな流路となり、本沢の本命となる。



■ 深く大きな本沢で水量、水勢の大きいことを物語。



■ 本郷集落の西端に向う本沢。



■ 集落の西端で古本沢と合流して本郷集落へ流下する本沢。五叉路と広場のある要地。

3. 上原古墳群及び上原古墳の調査

はじめに

昭和5年、上原古墳が発見された。優秀な出土品、築造や場所の特異、そして穗高神社や安曇部との関係などをめぐって、調査や論評が行われてきた。主たるものを見せてみる。

① 古墳発見と猿田氏の発掘調査（昭和5年5月）「上原区古墳発掘記録」「信濃考古学会誌II 5・6号」

上原地籍の水田中に発見された古墳が、上原古墳（G1号墳）である。田の所有者、寺鶴兵八氏が田の耕地整理のため地均し工事をしていたところ、大石に当り、これを取り去ろうとしたが、更に大石数個が出現、不思議に思って昭和5年5月22日、山田実氏に相談、古墳ということで穗高小学校長松岡氏の手を経て、豊科高等女学校の猿田文紀氏に調査を依頼する。直ちに24・25両日の発掘で次のような成果を得る。要点のみ掲げれば

- 横穴式石槨古墳で、恐らく円墳であったものと見られるが、丘の痕跡は無い。
- 左右奥の石壁と天井石2ヶ現存するのみ。正南に面して南北の長さ8.1m（翌年の再調査にて長さを10.1mに訂正）。奥壁基底に1枚縦0.85m、横1.2mの大石の使用で、他に大石の使用無し。石質は鳥川系統の花崗岩のみで築造。底面には小礫と砂利を23cmの厚さに敷いてあった。蓋道無し（再調査で無しを訂正）。
- 発掘物 ①祝部土器（須恵器）破片約100ヶ、完全なるもの一つも無し。②玉類 13個 ③金環2個 空管。④馬具破片多数、金張り装飾精巧なるものあり。⑤刀3振り ⑥人骨ごく少數。
- 忠実な実測の記録 多数

以前発掘されたと思われる疑問の点は、玄室上部、現表面より約10cm位にて、馬具の破片数点発掘されたこと。発掘物の大部分は槨の底面、砂利層の辺にあったが、土器の破片及び馬具品が垂直的位置も、水平的位置もかなり異なったものがあったこと、等である。

② 今井氏による調査（昭和7年8月）『穗高町上原の堅穴式石槨古墳』

昭和7年、調査委員今井真樹氏による調査並びに検討がなされる。今井氏は、2年前の猿田氏の調査報告文に従い、終りに私見を加えた報告書を残している。その要点をあげれば

- 西・東両水田面の高低差1尺6寸（48cm）であり、この古墳の石槨両側壁上面が、下の水田面と等しく、石槨蓋石上面が上の水田面と同じであったものと思われる。
- 或は言う。当古墳は最初洪積地に築造された横穴式石槨古墳であったが、鳥川の氾濫による沃土の堆積を重ねて古墳を埋没せしめ、現状になったと。
- この上原古墳は全く平地に掘り込んだ堅穴式石槨古墳で、安曇地方殊に鳥川流域古墳群中二つが存在するを見れば、この地方の特色ある古墳を見て誤りはない。
- 他の古墳の全てが穗高神社の神域を避けているのに、どうしてこの上原古墳のみ域内にあるのか

など、5項目の仮説を挙げて今後の課題とする。

○ヒスイ製丁字頭の勾玉、これは高貴の人の佩用するもので、貴重品。

③ 栗岩英治氏「発見された疑問の数々」(昭和1年)『信濃』I-2-11

栗岩氏は「南安曇地方の史前史後」の論文の中で、地方色濃厚な古墳として上原古墳をあげ、今井氏の調査報告を、正に卓見と評価し、是にある多くの古墳を見たり話を聞いて歩いたが、ことごとく石廓が地平線下で、かような石廓のみを持つ古墳群の地方は、何となく或異なった民族性の存在を想像せむる。としている。

④ 大場磐雄氏講演会(南安曇教育会主催)(昭和26年8月)

大場氏は「かって、栗岩氏が安曇族の特有古墳だと説かれた地下式竪穴墳は、他地方に多い後期または晩期古墳の特質を示すもので、安曇族特有とは言えない」と修正した。

⑤ 「信濃考古総覧」下巻(昭和31年)

「松本平地方古墳概観」の中で、塚原の中上古墳を誤って上原古墳とし、「穂高町にある地下式竪穴石室は、信濃では珍しい内部構造だ」として紹介している。

⑥ 藤沢宗平氏他調査(昭和43年9月)『農振開発地域埋文緊急調査報告書』No.70

遺跡: 9m×5mのもので、側壁を僅かに残している程度で、中位の自然石を利用し、2段又は3段に積んでいる。石室は竪穴で、長さ9m高さ1m、幅1.8mで、天井石は付近に散乱する。猿田氏、今井氏の調査報告があり、直刀、金環等も出土している。G群1号墳としている。

⑦ 「南安曇郡誌」II巻上

第2節古墳の上原古墳の項で、出土品の説明とともに、石室は竪穴式で、長さ9m、高さ1m、幅1.8mとしている。

第4章古墳文化のところで、この地域の有力者の存在を肯定するものとして、上原古墳が考えられる。後期弥生文化がそのまま地生え的に発展し、血縁的社會から地縁的社會への変質を示はじめ、階層文化も進行し、その支配層は、上原古墳を築造するまでに強力なものとなったと思われる。

⑧ 「穂高町の古墳」(昭和45年)(穂高町教育委員会)

穂高町古墳の形式は、横穴式石室を持つ円墳で、石室の方向は大体南東向きである。ただ一つ上原古墳だけは竪穴式古墳と報告されている。

⑨ 「長野県史考古資料編」(昭和56年)

「上原古墳は、水田造成時に発見されたもので、発掘時に墳丘は存していなかった。そして松本市安塚古墳と全く同じ構造をとっている」としている。

⑩ 「信濃35-11-407」(昭和58年)

県史編さん事業の一環として、岩崎卓也・松尾昌彦・松本公仁の三氏によって、有明古墳群の再調査が行われた。上原古墳については、昭和5年、猿田氏によって横穴式石室を持つことが確認されている。そしてさらに遺物の調査が念入りになされた。その結果

- 上原古墳は狭長な石室、南開口、半地下式、無袖の横穴など、A—1号墳(陵塚)と共に通点を有し、よく類似する。出土遺物は古相と新しい特徴のものとが混じり、6世紀後半を上限とする古墳である。
 - 有明古墳群は6世紀後半から7世紀前半の比較的短い期間に造営されたことが推定される。出土遺物のあり方を見るならば、6世紀後半に築造の盛期があった可能性が強い。
 - 有明古墳群は大きくA、B、Cの三支群より成る古墳群である。すべて横穴式石室である。また牧(E群)と塚原(F群)は立地や両群の距離などからして一括した支群とした方がよい。内部主体はすべて横穴式石室である。有明古墳群は扇頂部のみに分布するのに対し、E・F群は扇央部近くまでその広がりを見せており、つまり二大古墳群が想定される。
- その他、単独墳として、大塚、上原の古墳が存在するが、総じて穂高町の古墳の分布は扇頂部に集中する傾向が顕著である。

⑪ 「最古の砂鉄刀」(信濃毎日新聞昭和62年1月1日)

上原古墳出土の直刀、長さ66cmは穂高神社に社宝として納められている。この破片を新日鉄が開発したCMAで見たところ、チタンが残留していることが判った。ということはこの鉄が砂鉄で造られたものであることを示している。このことの意味することを要約すると

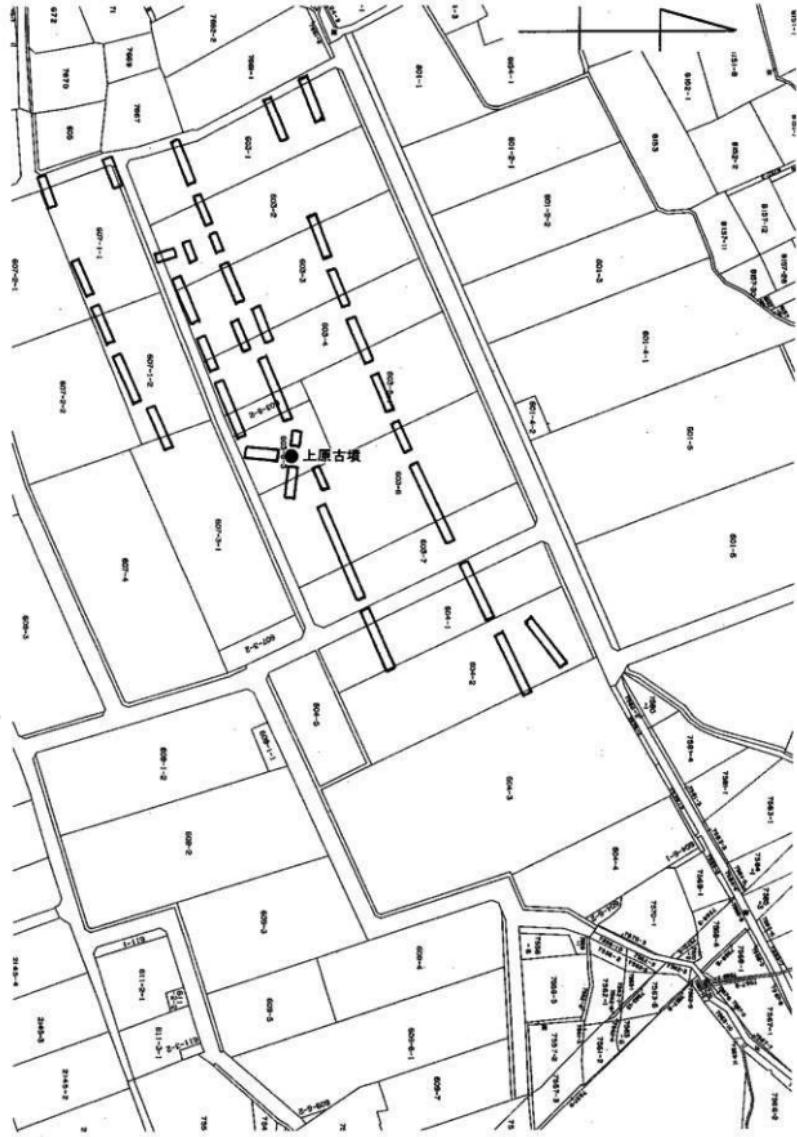
- 上原古墳の築造が6世紀後半とすると、日本で砂鉄製鉄が始まってすぐ後には安曇地方にその鉄器がもたらされた。(東工大 福田豊彦教授)
- 鍛造の難しい直刀の持つ意味は、西日本で先端技術を開発した強い力を持つ氏族が、日本海添いに直接この地方に進出したという見方が成り立つ。(新日鉄 佐々木博士)
- だが同じ古墳から出土した馬具は、砂鉄ではなく鉄鉱石から造られていることがわかった。佐々木さんは直刀と馬具の生産地は違うと考えられ、鉄文化から見ると、安曇地方は西日本とのつながりが強い一方で、畿内とのつながりもあった。ユニークな文化圏。(同上)
- 製鉄技術を習熟した安曇氏が安曇地方に定着、地元の砂鉄で製鉄を始めたと考えられないか。立足という有名な砂鉄の取れるところがある。(学習院大黛弘道教授)

⑫ 「穂高町の古墳群とその人々」(平成元年5月)(穂高町教育委員会)

この古墳は、横穴式石室をもつ円墳で、墳丘は既に削平され半地下式石室のみ残っており、その規模は石室の長さ10.1mであったとされている。多くの優れた副葬品の出土があった。

⑬ 「穂高町誌」(平成3年1月)(穂高町)

第3節古墳時代、G群の項で、F群の東端より東へ700m、標高差20m下がった上原地区の水田内に上原古墳は築かれている。今まで調査された古墳は上原古墳だけだが、この東方約半km地点に「塚



第16図 上原古墳(群)調査範囲図 (1:2,000)

田」の小字があること、付近より明治33年に大石を掘りだし、石塔3個を作ったこと、昭和4年にも大石2個を掘り出したこと等から、今後の発見が予想できる。

出土品から6世紀後半を上限としている古墳である。同じく石室を地表面下に築いたF1号古墳が、西700mの地点にあることから、G群をF群に含めることも考えられるが、1世紀の時間的空白があるため群とした。

以上謎の多い上原古墳の調査・論評を古い順に掲げた。

2) 単独墳か又は周辺にまだ存在したか

基盤整備事業の進捗に合わせるために、先ず古墳周辺を広範囲にわたって、伝承に基づく古墳の存在等を確認するために試掘（トレンチ）を行った。

先の項で述べたように、多くは単独墳としている。しかし近頃になっての聞き取りでは、『穗高町誌』の記載のように、上原古墳東方約半km地点に小字「塚田」の地名があり、付近から大石数個を掘り出している事実がある。また同じく東方約500m、今井沢右岸で昭和20年代、畑の基盤整備の時に石積みを掘り出し、大勢の人が見物に訪れた（保尊和夫氏）という。

扇状地の扇頂から扇央にかけての、洪水常習地帯ともとれる場所では、後期古墳はその構造から地下に埋もれやすいのかもしれない。いずれも基盤整備の段階で発見されている。田中の石積みも恐らく古墳だったろう。

今回の基盤整備に当って、古墳周辺に数多くのトレンチを入れて調査を実施したが、発見はできなかった。しかし今後の発見も皆無ではなさそうで、G古墳群となる可能性も残っている。

3) 上原古墳構築方法について

上原古墳の構築を探るため、古墳の西側、東側、南側の三か所にトレンチを入れて調査した。セクション図の石室は、現在の石積みの上限レベルを基準に、猿田氏の調査結果図より復元してある。土層の観察から読み取った解説は、次のようである。

○古墳築造時の地表面はX層及びXI層が該当している。この層の西側と東側の高低差は約30cmで、東下がりの傾斜地での築造である。

○石室は当時の地表を約1m掘下げて構築されていると考えられる。石室の石積みの様子は現在は埋もれてしまい確認することができなかった。

○マウンドを構築したと見られる土層は、西側はVIIとIX層、東側はVIIIとIXとXI層が該当する。西側は地形が高いこともあってなだらかな傾斜をしており、周溝を持つ可能性もある。また西側トレンチには集石が認められ、石の下から須恵器蓋と壺が破壊された状態で出土している。この遺物は後述する。集石の性格は構築時の土止め又は祭祀的なものと見られる。東側は西側に比べて、地形的に低いためやや急傾斜である。そしてマウンドの裾は洪水層に押し流され、周溝のあるなしは不明である。

墳丘の高さは、あくまで推測であるが、構築時の地表面から約2m位と考えられ、自然傾斜の為西側の裾が東側に比べて2m程長い、非対称性だったと考えられる。

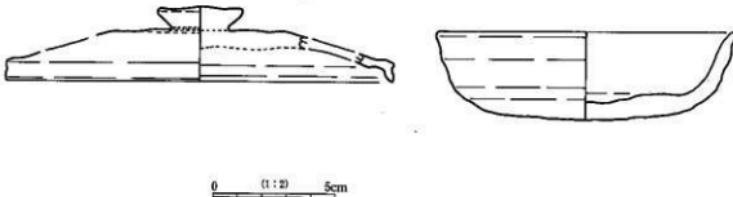
- 構築時のマウンド面VII層は腐植質の黒色土で、艶がないので針葉樹ではなく、雑草か潤葉樹の葉で平均3cm厚に堆積する時期があったことがわかる。
- その後一回洪水性の流れに周辺が見舞われる時期があり、VIとVII層が堆積する。VII層は砂質であるがVI層は拳大の礫を含む砂礫層である。
- 時代の判定は出来ないがその後、畑として開墾される時期があり基盤整理によりV、VI層ができる。その際墳丘の一部が削られている。
- 統いて水田化の為の基盤整備により、II層（田土）ができる。西側では下層に沈殿層を生成している。そして近年には畑としての耕作がなされ、I層を形作っている。

4) 西側集石内出土遺物について

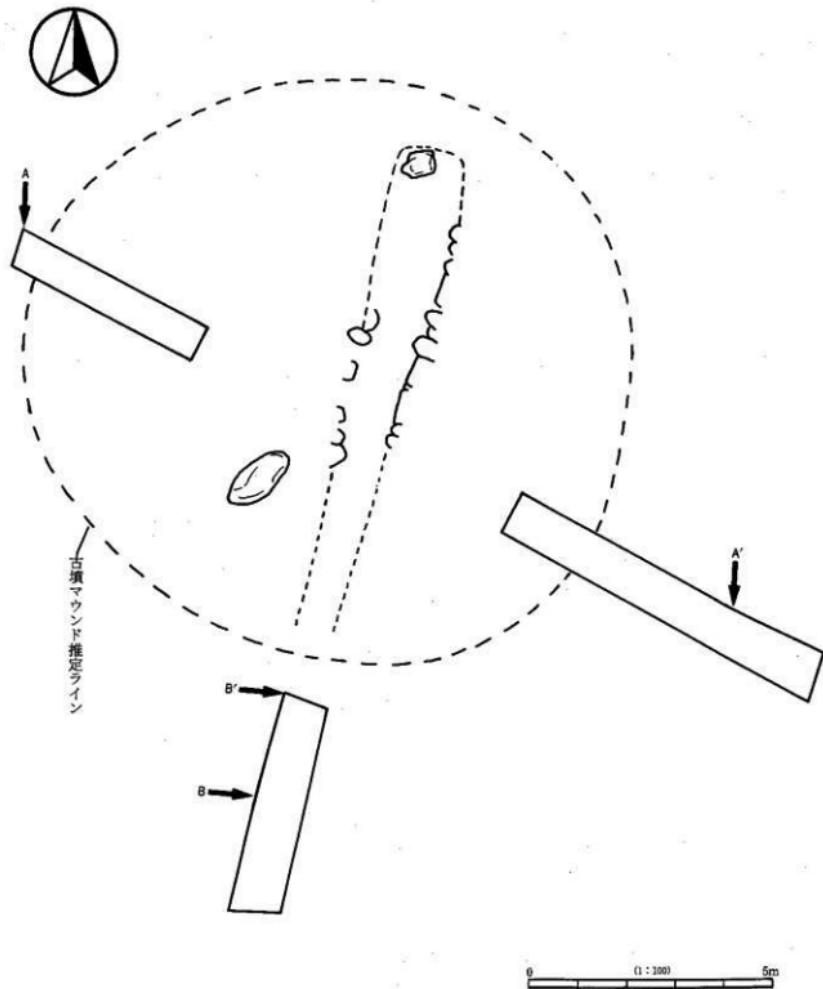
出土した遺物には須恵器蓋と坏（無台）がある。ともに集石の下からの出土で、故意に細かく割られた感があった。蓋は破片が細かく剝離も激しいため、図上での復元である。口径は約16.0cm、器高は約3.1cmを測り、直径3.6cmの大きめの扁平な鉢がつく。色調は灰白色を呈し、焼成は不良である。

坏は残存率が全体の1/4のため、反転復元の図である。底径8.4cm、口径12.2cm、器高3.6cmを測り、底部を回転ヘラ切りの後、回転ヘラ削りをして調整している。色調は淡黄灰色を呈し、部分的に淡緑色の自然釉がかかる。焼成も良好である。美濃陶系の産と考える。

以上2点の遺物の他、図化できなかったものに、須恵器蓋破片、須恵器高台付破片があった。時代は全て8世紀初頭と考える。



第17図 上原古墳出土土器実測図



第18図 上原古墳調査範囲図



上：上原古墳全景

左：上原古墳西側集石出土狀況



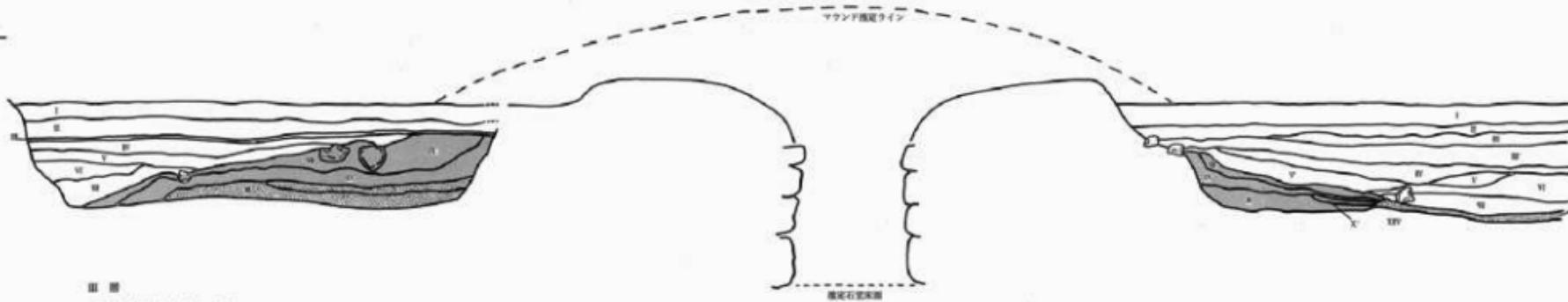
現場作業風景

土層調査



同 上

左：トレンチ掘削
右：トレンチ埋戻し
後の整地作業



三

(西側は主手の内であった？ ため
て西側が弱いのか)



- 1) 高橋先生「魔術の説明」
 - 2) 高橋先生「手紙の解説」
 - 3) 不良少年たちと戻り道 (田舎店員が魔術師)
 - 4) 三月馬鹿 (魔術師が入る旅館) 03年春祭り魔術師がモード演説
 - 5) 魔術師店 (魔術師とモード) 中央商店
 - 6) 魔術師店 (魔術師とモード) おみやげ屋
 - 7) 魔術師店 (魔術師とモード) おみやげ屋
 - 8) 魔術師店 (魔術師)
 - 9) 魔術師店 (魔術師)
 - 10) 魔術師店 (魔術師)
 - 11) 魔術師店 (魔術師)
 - 12) 魔術師店 (魔術師)
 - 13) 魔術師店 (魔術師)
 - 14) 魔術師店 (魔術師)
 - 15) 魔術師店 (魔術師)
 - 16) 魔術師店 (魔術師)
 - 17) 魔術師店 (魔術師)
 - 18) 魔術師店 (魔術師)
 - 19) 魔術師店 (魔術師)
 - 20) 魔術師店 (魔術師)
 - 21) 魔術師店 (魔術師)



第3回 上級者種セクション問題

穂高町

一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡
穂高沢水系による開発沢、上原古墳

—組い手育成基盤整備事業穂高
西部地区に伴う発掘調査報告書—

平成13年3月16日 印刷
平成13年3月26日 発行
発行 穂高町教育委員会
印刷 もえぎ企画書籍

